

虚構の中の桶狭間

—『木下蔭狭間合戦』小論—

(一)

寛政元年（一七八九）二月初演『木下蔭狭間合戦』は、初編五冊・次編五冊からなる大閤記物の時代浄瑠璃である。作中の年代設定は、二冊目が天文十九年（一五五〇）夏であり、一冊目「発端」と二冊目の間、および五冊目と六冊目の間には、それぞれ十余年の時間経過を置く。前半の初編五冊は此下当吉久吉（木下藤吉郎秀吉）が小田春永（織田信長）に仕える以前の時期にあてられ、次編六冊目に至って当吉が小田方の「新参の軍師」となっていることが敵国美濃の陣中で報じられる。史実の豊臣秀吉（二五三七—九八）にあてはめれば、二十代頃までの事跡を扱う作品ということになる。

本作での当吉は、斎藤義竜との合戦では軍師として小田方を勝利に導き、管領三好長慶による足利将軍義輝弑逆計画では、それを未然に防ぐため、春永の名代として上洛する。『木下蔭狭間合戦』は、こうした若き日の此下当吉の活躍を中心に、盗賊石川五右衛門の生立ち・当吉と五右衛門の出会いから対決といった内容の別筋が、これに絡むという構成になっている。

いうまでもなく、題名中にある「狭間合戦」は、桶狭間の戦いを利かせている。永禄三年（一五六〇）五月、尾張に進攻してきた今川義元（一五一九—一六〇）と織田信長（一五三三—一八二）による合戦である。

『木下蔭狭間合戦』で戦闘場面が叙述されているのは七冊目「竹中砦の段」のみである。直前の六冊目「池鯉鮒陣所」「熱田社」と同日の出来事であり、内容の上からも連続している。作中で桶狭間の戦いを利かせていたのだとすれば、六冊目・七冊目を描いて他にはありえない。にもかかわらず、「竹中砦」に今川義元は登場しない。小田春永と対戦しているのは斎藤義竜である。これは「田楽狭間の戦いを斎藤道三の息子義竜に置き換えた趣向」だからである。

史実としての桶狭間と本作の関連性については、これまで言及されることはあっても、論じられたことはなかったようである。近年では、外題に「狭間合戦」とある

以上は自明な事柄とみなされているためなのであろう、両者の結び付きに敢えて言及しない傾向にある。そこで本稿では、「田楽狭間の戦いを斎藤道三の息子義竜に置き換えた趣向」がどのような形で具体的に実現されているのかについて、改めて整理してみたいと思う。

(二)

まずは、所謂「歴史」上の桶狭間の戦いについて確認しておく。

今川氏は足利幕府以来駿河守護を世襲してきた名家であった。義元の頃には、隣国の遠江・三河までもが支配下にあり、当時としては最大規模の軍勢力を有する東海地方随一の大名となっていた。一方の織田信長は、ようやく尾張半国を平定しようとしていた頃である。今川義元が兵を尾張方面に動かした目的は上洛にあつたとされている。義元は進軍当初から信長の尾張を併呑して行くつもりであつたらしい。通り道にある弱小国にしか見えなかつたのであろう。事実、軍勢力の差は歴然としていた。『信長公記』によれば、今川勢の自称「四万五千」に対し、信長方は「二千に足らざる御人数」であつたという。その義元を、信長は三河から程ない尾張領田楽狭間（桶狭間の北方・現愛知県豊明市）で戦死に追い込む。今日でこそ今川方が動かし得た実勢兵力は約二万五千と推測されているものの、ともかく約十分の一程度の兵力で信長は勝利をおさめたことになる。

兵力の上では圧倒していたはずの今川義元を織田信長が撃退する。源義経による一の谷の戦い（寿永三年（一一八四）二月）や屋島の戦い（文治元年（一一八五）二月）などと同様、典型的な奇襲攻撃による勝利であつた。桶狭間の戦いは、それまで東海の出来星大名に過ぎなかつた信長の名を全国に知らしめることになる。後世から顧みれば、信長が成し遂げようとした全国制覇の第一歩ととらえることもできるであろう。多くの人形浄瑠璃の作者にとって、興味を惹かれる題材の一つだつたに違いない。ところが、近世においては、脚色の対象として迂闊に手を出せない事情が、桶狭間の戦いにはあつた。尾張を攻撃する側には、今川氏の支配下にあつた三河岡崎の当主が

飯 島 満

加わっている。松平元康、後の徳川家康（一五二四—一六一六）である。家康が敗戦側にいた桶狭間の戦いは、あまりに直截な脚色では舞台にのせにくいのである。

もつとも、今川義元の実名を出すこと、それ自体への遠慮は、さほど大きくなかったであろうと想像される。桶狭間以後、今川氏の家勢は急速に衰える。江戸時代には、高家として辛うじて家名を保っているに過ぎなかった。そうではあつても、仮名ですら、小田春永や此下当吉に類するような容易に実名を連想させるものであれば、合戦の場面には出しにくい。桶狭間の戦いを脚色していることがあからさまになつてしまふからである。題材が桶狭間だということになれば、松平元康は作中の誰なのかといった詮索が起りうる。上演差し止めを命じられる危険性も当然出てくるであろう。

小田春永と敵対する隣国の戦国大名として『木下蔭狭間合戦』に登場するのは、美濃の斎藤道三と義竜父子だけである。戦っているのは、表向きは、美濃と尾張である。そこで、「歴史」上の美濃斎藤氏三代と織田信長の関係についても、念のため、概観しておきたい。

戦国時代、美濃と尾張は長く敵対関係にあつた。斎藤山城守道三（一四九四—一五五六）と実際に対戦していたのは、信長ではなく父の織田信秀（一五一〇—一五二一）である。道三が天文十一年（一五四二）に美濃を押領する以前から、信秀は事あるごとに美濃へ攻め入っている。美濃の攻略が目的であつた。天文十八年（一五四九）二月、道三の娘（濃姫）と信長の政略結婚が整い、両国は和睦する。結局、信長本人は岳父の道三と戦地で対峙したことはなかつた。弘治二年（一五五六）四月、道三は継嗣である斎藤義竜（一五二七—一六一一）との内戦で首を討たれ敗死する。義竜の廃嫡を道三が決意したことが原因だつたという。道三の歿後、信長は執拗に美濃へ侵攻するようになる。ただし、信長が美濃斎藤氏の居城である稲葉山城を攻め陥したのは、永禄十年（一五六七）八月になつてからであつた。既に義竜は永禄四年五月に病死しており、美濃から敗走したのは義竜の嫡男斎藤竜興（一五四八—一七三三）である。ちなみに、若き日の秀吉の武勇伝として名高い永禄九年九月の墨俣での築城（『太閤記』）、通称「墨俣の一夜城」は、このときの美濃攻略をめぐる攻防戦の一齣であつた。

『木下蔭狭間合戦』一冊目・三冊目は、「竹中砦」に至る美濃・尾張両国の合戦前史に相当する。舞台は美濃である。斎藤道三と三好長慶は、「心よからぬ小田春永」を、美濃に下向する御院使の饗応取持役として伺候させ、その場で毒殺してしまおうと企む。稲葉山城にやつて来た春永が「異形の出立チ」であるとの知らせを受けた道三の家臣達は、嘲弄しようと待ち受けるが、装束を「天情備はる大名風」に改めた春永の威儀に気を吞まれ退散する。道三の悪計に便乗した義竜は、父親道三の毒殺には成功するものの、肝心の春永は取り逃がしてしまふ。春永を慕う道三の娘花形姫はその跡を追う。

信長と道三が直接会見したのは史実である。勿論、道三の生前に信長が美濃稲葉山城に向いたことはない。二人が参会したのは、天文二十二年（一五五三）四月、両国のほぼ中間地点に位置していた富田聖徳寺⁽¹⁰⁾においてであつた。作中で春永が「異形の出立チ」から「大名風」に改め周囲を驚かせるという場面は、このときの出来事から着想されたものである。『信長公記』は「斎藤山城道三、富田の寺内正徳寺まで罷出づべく候間、織田上総介殿も是まで御出で候は、祝着たるべく候、対面ありたきの趣申し越し候」と、二人の会見は道三側からの申し出であつたと伝える。信長は年少の頃から異装を好み、元服後も型破りの挙動が修まらなかつたことから、多くの者は信長を「たわけ者」と評していた。道三が娘婿である信長との会見を求めたのは、その実否を自分の目で確かめるためであつたという。信長は、聖徳寺までは奇矯な風体でやつて来るが、道三との対面の場には尋常の衣服に着替えて現れる。『信長公記』は「御家中の衆見申候て、去ては此比たわけを態御作り候よと、肝を消し」、さらに道三は聖徳寺からの帰途「山城が子供たわけの門外に馬を繫ぐべき事、案の内にて候」と予言したと伝える。

二冊目・三冊目には、こうした周知ともいへべき題材による場面や脚色が散見する。例えば、常軌を逸した信長の行動の中でも取分け知られていたであろう父信秀の葬儀で祭壇に抹香を投げ付けたという一件は、「現在父祖の靈廟へ。抹香搦んで投たとやら。畢竟狂人、同然の行跡」と、本作中では道三の家臣による噂話の中で生かされている。義竜による父親道三の毒殺、道三の娘花形姫の春永への恋慕も、義竜による道三弑殺、信長と濃姫の政略結婚を脚色していることは言うまでもない。三冊目の結末は、春永が美濃から尾張へ単身逃れ去る場面となつている。これは、美濃との合戦の度に尾張へ押し戻され敗走したという信長の姿を面影としてしているのである。

六冊目・七冊目は、それから十余年後の「文録四年の夏」である。美濃と尾張は交戦中で、「去冬よりの合戦」は終盤を迎えている。戦闘は尾張に侵攻した美濃軍が優位に進めており、義竜は「今一ツ戦にて敵の落去」と見ていた。

ところが、美濃の軍師竹中官兵衛重晴（竹中半兵衛重治）は、尾張軍の連敗を詭計ではないかと警戒し、こころばらくは義竜に出兵を控えさせている。膠着状態の中、左枝犬清（前田犬代）は、官兵衛の預る砦内で「軍師久吉が謀」を一命を賭して遂行し、春永の手勢は少数との情報も確実なものであると官兵衛に思い込ませる。出陣した義竜は、当吉の策略で狭隘な地に追い詰められ、そこで首を討たれ敗死する。

戦国時代、実際に美濃と尾張の間では戦闘が幾度となく繰り返されてきた。六冊目・七冊目の合戦は、二冊目・三冊目で描かれていた両国の緊張関係を受けたものであり、「歴史」上の合戦（あるいは複数の合戦を畳み込んだもの）を題材としているかのように展開する。確かに、史実でも最終的には美濃斎藤氏は信長に敗れる。それを

義竜の戦死という形に脚色したのだと考えれば、「竹中砦」の結末は「歴史」から逸脱しているとはいえないかもしれない。しかし、作中での武力衝突の内実は、美濃と尾張のものとしては、あまりにも非「歴史」的なのである。

そもそも、美濃・尾張の国境を侵していたのは、専ら織田側なのである。上洛を目論む信長にとって、美濃の攻略は是非とも必要であった。美濃路をとることが京都への最短距離だからである。反対に、美濃の軍勢が積極的に尾張へ外征したことはなかったようである。美濃斎藤氏三代の中で美濃と尾張の戦闘で討死した者もいない。道三にしろ義竜にしろ、織田軍との合戦では、決定的な敗北を喫したことすらなかった。ただ一人敗れた竜興にしても、歿したのは天正元年（一五七三）である。身を寄せていた越前朝倉氏が信長に滅ばされたとき、運命を共にしたのであった。本作のように、美濃の当主が尾張領内へ兵を進め、尾張領内で敗死するというような合戦、あるいはこれに類似した経過をたどる両国の合戦は、「歴史」上存在しない。その意味においては、「竹中砦」で描かれているのは、架空の合戦なのである。

春永と義竜の決戦の地も、本作が美濃と尾張の合戦を描いているのだとすれば、到底「歴史」上ありえない設定である。「竹中砦」で注進が「桶狭間に屯有ル。義竜公の御陣の勢」と報告しているように、桶狭間で戦っていたのである。

美濃と尾張の合戦場として広く知られているのは墨俣（現岐阜県安八郡墨俣町）である。墨俣は木曾川と長良川の合流点で、両国の境界線に位置する。墨俣の北が美濃、南が尾張となる。当然のことながら作者はそれを知っていた。合戦の場所として二回、「両国ノ境川の股川に陣せしが」、「領地の境、洲股川に陣し勝負は牛角と見へたる所」と言及されているのである。また、春永が美濃から脱出する三冊目の場面にも「洲股川。ひらりと飛込ム水煙」とある。そうした知識がありながら、「竹中砦」では「洲股川」を「領地の境、洲股」で激突させなかった。「軍師竹中官兵衛重晴が計らいて。此参河路へ後陣を廻し東手より攻たる故」とあるように、本作中での美濃軍は、三河まで遠征して来ており、北からではなく、「東手より」春永を攻撃していたのであった。ここでの「竹中官兵衛重晴が計らいて」は、両軍が南北に対峙する墨俣において、美濃軍の一部が虚を突いて東方から尾張軍を急襲するといったような小規模な作戦ではない。現在の県名でいえば、岐阜県から攻撃していた主力部隊が、東に大きく迂回して静岡県側に移動したということである。ほとんど実現不可能というだけでなく、政治情勢の上から見ても無理がある。三河松平氏は、桶狭間以前であれば今川義元の支配下であり、以後であれば織田信長と同盟関係を結んでいるのである。

春永と義竜の決戦が桶狭間で行われていたことは、「竹中砦」の後半、三回登場する注進の内の二人目が、軍師竹中官兵衛に義竜の苦戦を報告する際に一度だけ出てくる（三人目の注進では普通名詞「狭間」が一度）。ただし、桶狭間という地名こそ「竹

中砦」の後半に一度しか出てこないが、「歴史」上の桶狭間の戦いに直結する地理的名称であれば、実は六冊目「池鯉鮒陣所」から、何度となく作中に出しているのである。こと義竜側の人物に関しては、竹中半兵衛重治（一五四四—一七九）を除けば、美濃の地名に因むおそらく架空の人名（四の宮源吾・垂井藤太・大垣三郎等々）を無難にも出すだけで、今川義元および義元陣中の人物と思わせるような武将を全く登場させないのとは対照的である。

三河路で義竜は「池鯉鮒の駅に野陣」を構えていた。池鯉鮒（現愛知県知立市）は、今川義元が三河で本陣を置いた場所の一つであった。

「竹中砦」の小田側の戦況は、「鷲津丸根を始として」既に幾つかの砦を打ち破られ、「残るは丹下中島両所」であったと設定される。これら四つの砦は、尾張領内にある今川方の最重要拠点、大高城と鳴海城の付城（敵対国の城を攻撃する目的で築かれる軍事基地）として実在していた。大高城に対峙する鷲津砦（現愛知県名古屋市緑区大高町に砦跡）と丸根砦（同地に砦跡）は、信長の領地の中では対今川軍の最前線に位置することとなり、桶狭間の戦いでは、作中での合戦経過と同様、真先に攻め陥されてしまっている。丹下砦と中島砦は、善照寺砦（『木下蔭狭間合戦』中には出てこない）と共に、今川軍の進撃を間近に控えた信長が、鳴海城を攻略するために、新たに設けたもの（いずれも現名古屋市緑区鳴海町に砦跡）であった。「信長公記」に拠れば、鷲津・丸根両砦が陥落した後、信長は居城のある清洲から丹下砦、善照寺砦、中島砦と出向き、そこから桶狭間に向かったという。

また、小田方が「矢種兵狼玉薬も至つて乏しき小勢」に過ぎず、「敵キの多勢にくらへては、敵に玉子を打がごとし」であるという状況は、半ば義竜をおびき寄せさせるための偽情報ではあったが、桶狭間の戦いを意識したものであろう。自軍を完全に圧倒する軍勢を自領で迎撃しなければならなかったのは、信長の生涯でも桶狭間の戦いだけであった。「歴史」上は病死していたはずの斎藤義竜は「竹中砦」では首を討たれ最期を遂げる。これも、田楽桶狭で今川義元が乱戦のさなか首を討たれ敗死したからである。

その他に、小田春永の家臣に、桶狭間と関わり合いのある人物を登場させている。春永から勘当を受けている左枝犬清である。永禄二年、前田利家（一五三八—九九）は、信長の同朋捨阿弥を斬殺し、出仕停止処分を受ける。「信長公記」は「義元合戦にも、朝合戦に頸一つ、惣崩れに頸二つ取り進上候へども」、信長の勘気は解けなかつたと伝える。本作では、「竹中砦」で切腹する左枝犬清の遺児を左枝時家（前田利家）とする。桶狭間合戦の頃、実際に信長の勘気を蒙っていたのは利家本人であり、父親ではなかつたのだが、左枝犬清の人物設定もまた、「竹中砦」が桶狭間の戦いであったことを示唆するものであったことになろう。

「竹中砦」で叙述される戦闘は、対戦しているのが美濃と尾張であるならば、「歴史」的事実と合致しない。合戦の状況や経過、地名はほとんどそのままにして、対戦相手だけを今川義元から斎藤義竜に入れ換えているからである。ただし、それによって生じた不整合は、戦国時代の「歴史」や地理について、いささかなりとも精通していない限り、容易には気が付かないであろう。敵対していた美濃と尾張の「歴史」的事実に基づく二冊目・三冊目は、六冊目・七冊目での架空の合戦に、一種の現実味を帯びさせることに繋がっているといえる。

桶狭間の戦いで木下藤吉郎が手柄を立てたとする同時代の記録は伝わっていないようである。先にも触れた墨俣の一夜城が広く知られているように、むしろ美濃との合戦の方が結び付きは強かった。藤吉郎が信長に仕え始めた時期について、「太閤記」は永禄元年九月とする。仮に永禄初年頃の時点で信長の家臣になっていたのだとすると、桶狭間の戦いに参戦していた可能性は高い。しかし「太閤記」でもそれに言及するところがない。せいぜい一戦闘員として加わっただけであつたのだろう。太閤記物としての本作は、木下藤吉郎の、おそらく戦場にはいたに違いない桶狭間の戦いでの、「歴史」が伝えなかつた武勇を語る浄瑠璃なのであつた。

なお六冊目・七冊目の年代設定「文録四年の夏」の文禄（一五九二—九六）は、直接「永禄」とするのを避けた作者の配慮であろう。また、桶狭間の戦いは「四年の夏」ではなく永禄三年五月であつた。「四年の夏」としたのは、永禄四年五月に義竜が病死していたことを受けているのではなからうか。義竜は、道三の実子ではなかつたとの説もあるが、父親殺しという近世の道徳観念からすれば最大級の不孝を犯している。「歴史」が伝える義竜病死の真相を明らかにする芝居であるという建前を、作者は、あるいは用意していたのかもしれない。

(三)

ところで、「竹中砦」の設定には一つ不可解な点がある。軍師竹中官兵衛の妻関路と娘の千里が、官兵衛の「預る」、つまり三河遠征中臨時に管理している砦に何故いるのか、その説明が無いのである。妻と娘ばかりではない。砦には腰元までがいる。「竹中砦」は千里と腰元達が武器の手入れをしている場面から始まる。そこでの腰元おすきの台詞「郷へ下かつて溜く」の、筒の掃除せぬかはり」は、腰元達が通いではなく、砦で生活していることを示している。

砦とは「外敵を防ぐために国境、海岸などに築造した建造物」「戦略攻防上の仮設の城」（日本国語大辞典）との語釈が穏当であろう。本作においても、「竹中砦」の義竜は次の攻撃目標を「丹下中島」両砦と定めて出陣する。作者が砦を戦略上の拠点に設営された軍事基地と認識していたのは明らかである。また、義竜が官兵衛の砦から

軍勢を率いて一気に戦地へ赴いていることから、砦の位置が尾張との国境線に近かつたことがわかる。したがって、戦況が一転すれば尾張軍の攻撃にさらされるのは必然である。「竹中砦」では義竜戦死の報が注進によって告げられた後、舞台上小田春永が登場する。尾張軍の攻撃によって砦は陥落したということであろう。砦の構成員は、戦闘が始まってしまえば、討死を覚悟をしなければならぬ事態に遭遇するかもしれないのである。「熊谷陣屋」の如く「女の身で陣中へ来る事」を「不屈至極」とみなすのが戦時の常識とすれば、本国美濃から遠く離れた三河の、しかも交戦中の尾張とは隣接していた砦に、何人も女子供が来ているというのは、いささか不自然な設定なのである。官兵衛は「敵の遠矢に数ヶ所の矢疵」を受け、砦に引き籠っている。とはいえ、軍師官兵衛の負傷で「軍事も暫し休じやげな」と腰元おすすが噂していることから、負傷したのは、おそらく数日前であろう。看病を理由に二人が美濃から呼ばれていたとは、時間的に考えにくい。

「竹中砦」の舞台は砦というよりも、むしろ「竹中官兵衛屋敷」を思わせる。官兵衛の屋敷は本国美濃にあつたはずである。官兵衛が砦内で軍慮をめぐらす場面での台詞「味方々は北方攻め水。時は三更子の上刻水に水を重ねぬれば南方の火の尾州を討に利有刻限」は、劇中での両軍の現在位置としては間違っている。美濃勢は三河に遠征中なのだから、義竜軍は東、春永軍は西である。「南方の火の尾州を討」は、美濃本国での発言でなければ理屈としてはおかしい。この官兵衛の台詞は、描かれている合戦が東西の激突（桶狭間の戦い）ではなく、南北の激突であるかのような印象を観客に強く与えるであろう。三河に駐留する美濃軍が尾張軍の「東手」から攻撃していることは、初演以後は殆ど上演されていない「池鯉鮒陣所」で触れられているだけである。「竹中砦」では、それが東方からの攻撃になるとの断りは無い。清洲と墨俣・桶狭間の地理的位置関係を瞬時に思い浮かべることができない観客に対してであれば、桶狭間（東西の合戦）を脚色しているということを臆化させる効果は期待できる。三河の砦を美濃の竹中官兵衛屋敷であるかのように錯覚させることは、「南方の火の尾州」の不合理を、観客に感得せしめないようにする工夫だったのかもしれない。他方、意図して屋敷の場面のような描き方をしたのではなく、七冊目「竹中砦の段」が、本来は三河または三河と尾張の国境近くの屋敷（城）の場面として構想されていたからであつたと考えることもできる。

竹中官兵衛が預る砦は「八ッ橋」にある。八橋（現愛知県知立市）は三河領内である。劇中で進行している戦闘の過程で、春永の領地から切り取りした砦ではない。官兵衛が三河に兵を移動するよう義竜に進言した時期は、開戦の「去冬」から翌年の「文禄四年の夏」の間でなければならぬ。美濃から三河八橋の砦に移つたのは、早くても半年程前であろう。一方、春永の家臣左枝犬清と「一々年々余り以前から」密か

に言い交わしていた千里は、親には「湯治と言イ立テ」、奉公人お高の在所で一子清松を出産していた。「竹中砦」の当日「文録四年の夏」、乳母となっていたお高は「けふがてうど誕生日」の清松を連れ、尾張領内の熱田神宮へ宮参りをしている。清松が生まれたのは、関路の台詞に「養子躰に貫はふと思ふて居る内両家の諍ひ」とあることから、二年前ではなく、おそらく一年前であつただろう。いずれにせよ、千里が三河へ行ったのは出産後であり、お高の在所は美濃領内（または美濃尾張の国境近辺）ということになる。

では、何故お高は、地理的には遙かに三河寄りの、桶狭間からも遠からぬ熱田に來ているのか。三河への義竜軍の進軍によって三河尾張の国境付近は当然のことながら戦地となる。そうした危険な地域に、千里が清松を連れ行きたいと思う訳がない。となると、戦闘が勃発した去年の冬頃（三河への戦地拡大が確実となる前）、お高の在所が臨戦地となつてしまつたので、取り敢えず熱田近辺へ避難したから、ということにでもなるうか。ただし、美濃から熱田に出るには、尾張領内を通り抜けなければならぬ。さもなければ尾張領の西を迂回して伊勢方面から入るか、東を迂回して三河方面から入るかである。美濃国内の非戦闘地域に出た方が、はるかに安全である。美濃の軍師の孫を連れて、敵国尾張に避難するというのも奇妙である。千里が清松を美濃本國で出産したことにすると、その後の経過説明に破綻をきたすのである。

お高が清松を連れて熱田社へ宮参りに來ているのは、単純に、お高の在所が熱田近辺にあつたからではあるまいか。池鯉鮒の陣所に召喚された関路は、砦への帰りがけ、熱田社を参詣している。三河八橋の砦は熱田神宮からさほど離れていない場所に設定されている。とすれば、千里は、美濃本國の屋敷からではなく、三河八橋の砦から熱田近辺のお高の在所へ出向き、そこで出産していたと考えるのが自然である。熱田神宮が尾張領内にある以上、お高の在所も尾張側だった可能性が高くなるもの、初めから熱田近辺に設定されていたのだとしたら、千里が子供を委ねるために出向いたのだとしても、それは決して不可解な行為ではない。信長は無神論者だったとされているが、熱田関連の制札や書状は桶狭間以前のものも伝わっており、地元の熱田神宮に対しては崇信する態度を取っていたという。草薙剣を祀つたことが起源とされる熱田神宮は、一般に武家からの尊崇も篤かつた。戦闘地域になるとは常識的に考えにくい。関路が「敵小田殿の領地」と承知の上で参詣しているのも、社域は中立地帯であるとの了解が共有されているからであろう。千里が乳飲み子を託す場所としては理に適っているのである。

千里と清松に関わる設定は、「竹中砦」を官兵衛が預る砦ではなく、平素そこで生活していた屋敷（城）であつたとした方が、おさまりがいい。千里は、三河尾張の国境付近の屋敷から、熱田社近辺にあるお高の在所に向い、そこで産まれた清松をお高

に託した後、屋敷へ戻り、一年後の「竹中砦」の当日を迎えていたというのが当初の設定だつたのではあるまいか。屋敷の場面であれば、妻子や腰元達がいて当り前である。例えば、三河から尾張へと進軍する軍勢に、土地鑑のある三河の智将が参謀として加わるといった筋立が、最初の構想だったのかもしれない。ところが、三河武士ということになると、作中で何を言わなくても、松平元康（徳川家康）の家臣とみなされるであろう。仮に松平元康をおわせるような人物を登場させなかつたとしても、家康の出身地である三河の武将が此下当吉久吉の軍略に翻弄され敗北するといった内容では、幕府当局の忌避に触れる可能性がある。そこで、三河何某の屋敷ではなく、三河とは縁も所縁も無い人物が臨時に預る砦という現在の形に変更したのではないだろうか。實在の竹中半兵衛は桶狭間合戦時十七歳であつた。「竹中砦」の官兵衛には孫がいる。両者の年齢は大きく隔たつている。その所以も根は同じ所にあるのかもしれない。

(四)

『木下蔭狭間合戦』六冊目・七冊目は、長く敵対関係にあつた美濃と尾張の「歴史」上は存在しない合戦として、さりげなくも大胆に桶狭間の戦いを描いている。題名の「狭間合戦」は、看板倒れではなく、紛れもなく桶狭間の戦いが脚色されていることを示していたのであつた。しかもそれは、芝居の進展に伴つて次第に明らかになつて行くといったものではない。あれこれ全体を見直したとき、脚色の対象は美濃と尾張による戦闘の「歴史」ではなく、桶狭間の戦い以外の何ものでもない、改めて気が付くのである。題材の扱いは慎重かつ巧妙であつた。とはいえ、桶狭間合戦を連想させる「狭間合戦」が、当時としては、相当に思い切つた外題であつたことに変わりはない。本作は「従来禁じられていたはずの、時局もの、大阪落城もの、徳川家に関わる題材などの脚色が、かつてない盛行を見せる」寛政前期に初演された。そうした時代であつたからこそ存在しえたのであり、同時に「狭間合戦」を標榜しながらも上演差し止めにはならなかつたという点において、まさに寛政前期の時代的風潮を象徴する作品でもあつたのである。

『木下蔭狭間合戦』「竹中砦」は昭和九年の文楽公演を最後に舞台での上演が絶えていた。範疇としては現行曲に含まれてはいても、稀曲であつた。しかしながら、平成十五年五月三十日大阪文楽劇場と同年十二月一日東京早稲田大学小野記念講堂（演劇博物館COE公開講座）における竹本綱大夫・鶴澤清二郎の素浄瑠璃公演によって、本曲は確実に未来へ伝承されることになった。『木下蔭狭間合戦』は、浄瑠璃史上ひとつの時代を象徴する作品として極めて重要であるばかりでなく、古典として伝承され続けていたことに、その真骨頂があるのである。

注(1) 未翻刻戯曲集『木下蔭狭間合戦』国立劇場芸能調査室(翻刻解説・宮本瑞夫。引用に際しては、漢字表記を一部改めたところがある。

(2) 山川静夫『綱大夫四季』南窓社、一六〇頁。

(3) 外題の「狭間合戦」が桶狭間の戦いに因むものであるとの指摘は、『綱大夫四季』(前出)以外にも、飯塚友一郎『歌舞伎細見』第一書房、平凡社『演劇百科大事典』(木下蔭狭間合戦)項(大村弘毅)、新潮社『増補改訂日本文学大辞典』(釜淵双級巴)項(黒木勘蔵)でなされている。

(4) 岩波書店『日本古典文学大辞典』「木下蔭狭間合戦」項(山根為雄)、岩波講座「歌舞伎・文楽」第九巻「寛政期の浄瑠璃復興」(松崎仁)は桶狭間の戦いに言及しない。

(5) 小島広次『今川義元』人物往来社、桑田忠親『織田信長』(『桑田忠親著作集4』秋田書店)、谷口克広『織田信長合戦全録』中公新書。

(6) 『信長公記』角川文庫。

(7) 『信長公記』に「今度家康は朱武者にて先懸をさせられ、大高へ兵糧入れ、鷲津・丸根にて手を碎き、御辛勞なされたるに依て、人馬の息を休め、大高に居陣なり」。

(8) 小瀬茂七『斎藤道三と稲葉山城史』雄山閣出版、桑田忠親『織田信長』(前出)。

(9) 新日本古典文学大系『太閤記』岩波書店。

(10) 重松明久『富田聖徳寺の所在地について』(『日本歴史』一四〇号)。

(11) 美濃を併合した後、信長は本拠地を稲葉山城に移し、名称も岐阜城と改める。信長が足利将軍義昭を美濃に迎えたのが永禄十一年七月、義昭を奉戴し上洛を果たしたのが同年九月であった。

(12) 『信長公記』は「斎藤山城道三攻寄るの由注進切々なり」(天文十六年十一月)と美濃の脅威に触れる箇所はあっても、尾張領土への侵攻に関わる記述はない。

(13) 古くは墨俣から南の長良川を墨俣川とも呼び習わしていたという(『墨俣町史』)。

(14) 小島広次『今川義元』(前出)、谷口克広『織田信長合戦全録』(前出)。

(15) 岩沢愿彦『前田利家』吉川弘文館。

(16) 木下藤吉郎の名が出る最初の文献は、永禄八年十一月八日堀内利定宛添状。『信長公記』での木下藤吉郎の初出は永禄十一年九月。

(17) 貞享二年(一六八五)成立『織田軍記』は、義竜の人物を「悪逆不孝」あるいは「無類の大悪人」と評し、「ためしすくなき大罪人のむくいにや、幾程なく永禄四年に義竜たちまち悪病を煩ひ、死去しけり」と記す。通俗日本全史『織田軍記』早稲田大学出版部。

(18) 明治大正期に入っても『木下蔭狭間合戦』が建狂言となった場合、六冊目は「熱田社」のみが上演されていた。

(19) 信長は桶狭間合戦の直前に熱田神宮へ参詣している。熱田神宮は、信長が最初に向った丹下砦と清洲城のほぼ中間地点に位置する。

(20) 八橋と熱田神宮は、実際には直線で二〇キロ近く離れており、気楽に立ち寄れるほど近くはない。熱田に近い今川方の拠点ならば、大高城あるいは鳴海城の方が相応し

い。官兵衛は「鷲津の攻口」で負傷している。本論でも触れたように、鷲津砦と丸根砦は大高城に対する付城であった。当初は、八橋の砦ではなく、大高城を想定していたとも考えられる。ただし、仮にそうであったとしても、大高城であることを受け手に強く意識させるような脚色は回避せざるをえなかったであろう。桶狭間合戦時、大高城には松平元康(徳川家康)がいたからである(注7参照)。

(21) 松田毅一・川崎桃太編訳『回想の織田信長 フロイス「日本史」より』中公新書。

(22) 桑田忠親『織田信長』(前出)。なお、桶狭間で信長が奇襲に成功した最大の要因は、戦鬪直前の天候の劇変にあった。『信長公記』は「俄に急雨石水を投打つ様に、敵の輔に打付ける。中略。余りの事に熱田大明神の神軍かと申候なり」と記す。

(23) 官兵衛に対する春永の発言に「元より斎藤旗下の貴殿。譜代恩顧といふにもあらねば」。

(24) 内山美樹子『浄瑠璃史の十八世紀』勉誠社、五六三頁。

(25) 『木下蔭狭間合戦』初演から十二年後、享和元年(一八〇一)一月『日吉丸権按』では、大団円となる五段目を、「駿州の大將。今川治部太輔義元」が登場する桶狭間合戦の場と設定するに至る。